

五月作品

月集スバル



☆今月の四人☆

義歯を鳴らす

杜 沢 光一郎 埼玉

鬱くははへる如き思ひに入れ歯はめ行きたくない会議に出でゆかんとす
東大卒ばかりが客の居酒屋と知りて苦々しく出できて唾吐く
コンピュータの仮想現実仮想現実とも知らず生真面目に生きし我にあらずや
修行の合間に尺八吹きゐし友なりしが行なかばにて縊り死ににき
悔しきこと咄へゐるにはあらねども我知らず義歯を鳴らすことあり

船底の量感

森 重 香代子 山口

背戸山に帰る鴉が船底船底の量感量感をもち頭上を過ぎつ
鳥さへにわれを見放ち騒騒騒騒と羽撃ち帰る日暮れし森へ

菩提寺の朝の凍土にもち出でて白木の位牌位牌どんどに焼べぬ
香焚香焚きて睦月の夜更け坐しをれば烟は翳す灰の面おもてに
古びゆく家のさびしさゴミ出しをして帰るさの路に仰げり

市原悦子さん逝く

影 山 一 男 千葉

子供より空を奪ひし戦争の語り部市原悦子さん逝く
戦争を知らない子供として育ち知らないままに齢傾く
黄と赤のチューリップ卓に飾りたりわが死後のある一日のごとく
スイーツと呼ばれとまどふ草団子のやうな我かも歌一首措く
杖と杖すれちがひたる交差点男の杖止まり女の杖進む

スマホ

水 上 比呂美 東京

雪原に立つ白鷺の詐欺メール正月早々巢魔圃なまぼに來たり
胸の字の中に凶あり創きずのある胸を包みて人は生きをり
脳のうの字の中に凶ありかなへびのむくろ小箱に入りたるごとく
鴉かららはスマホ持たずに交信し正確、迅速、簡潔ならむ
幾重にもうねり重なる暁げと暗かまざれつつ飛ぶ明け鴉からのこゑ

☆

☆



仲 宗角 三重

言ひたきを半分ほど言ひひしひしと原木の浮く河口を見て立つ夕潮ののぼれる河口刃をあつるさまに肉体しんたいに響けり
いぎたなく紅みだれ籬しく山茶花の稀釈しやくされあるごとき夕ぐれ存在をたしかむるにはあらねども遠山にこぶしの花芽ひかれり吾亦紅われも紅とひたぶるに在れど死を越ゆるてだてとてなく

奥村 晃 作* 東京

水島 晴子 兵庫
枯野ゆくわが耳もとに「おひとつ、おひとつ」少女の姉のお手玉唄が
一日の歩行のノルマ果すとてめぐる廊下の夜をしづげし
ほそほそと笛の音はあり夜の廊のBGMをひろひて歩む
国境ふ山の裾廻に翼しらく張るがに見えて遠き橋梁
ママと呼ぶこゑのなつかし九十の義姉を囲みてその子らが呼ぶ

武田 弘之 神奈川

のぼり坂避けてよたよた今月も歌会へ向かふ足弱われは
「がんばっているね東京タワーは」とすまして立てりスカイツリーは
水仙忌迎へて庭の水仙もほころびそめぬ人を偲ばん
とりわけて日数少なきささらぎの一日一日を急かず過ごさん
芽ぐみたる梅の小枝を揺らす風いづこより来ていづこへか去る

高野 公彦 千葉

正月も十連休も無縁にて人の食事を支ふる人ら
女性のこと母は女衆をんしゆと呼びあたり優しくて強く生きし女衆
上階の床踏ゆかむ音よ顔の無き遠き隣人の生きてゐる音
食べ終へし土佐文旦のゆたかなる果汁を迎へ臍腑しへいよろこぶ
新元号思ふことなく三月の風に揺れゐる丸葉つばき

天空より降り来し雪の一ひらがわが手の甲に触れるや溶けた
新市場ゆ新浦安まで窓越しに見えてる東京スカイツリーが
帽子美人と言つてもいいかわが妻は帽子おこよなく愛しみてかぶる
大石を取られてもなお続けるは相手のミスを待つ故と知る
改良種向日葵中央にすくと伸び土低く咲く松葉牡丹は

日影 康子 富山

陽の在り処かくす浮雲縁あかく燃えて雪消の水に映るも
寒つばきの繁みくぐりて鴨は蜜吸ひにくる日に幾たびも
寒鰯はけふでお仕舞と売り出すを二きれ買ひて塩焼きにする
精魂をつくして生くる外ほかはなし老の極北をめぐざして歩む
ささらぎの雪降る海の大うねり空とぶ黒き絨毯に似る

古屋 祥子 群馬

骨折は私の生のどの部分？ 車椅子にて外出をしよう
身を凭せ全力で見入るあかね空 飛行機雲が直線延ばす
肝炎も糖尿病も検査の数値よし 効ありや減塩食の旨きは
百合樹も公孫樹もすぱり落葉せり、葉つばき葉つばきは（音）音
街路樹のいちやう落葉を忌むひとら黄葉もみぢ直前の枝伐り落とす



桑原正紀 東京

昼過ぎのわが万歩計二〇〇歩に届かざりけり外は雪晴れ
雪とけて湿る黒土ふみゆけば春耕の兄に出会へさうなり
春待たず逝きたる兄の農事メモ置き去りにして春は来向かふ
九〇〇歩あるき得たるを今日の日の大仕事とせり 夕焼わらふ
一万歩に一〇〇〇歩足らぬを不満気に表示するかもこの万歩計

狩野一男 東京

どうといふこともなけれど何と無く憂しや二月は、二月は憂しや
あたらしく二月は来たりわが心二月が来るとなぜか乱るる
十二年前の二月の事だつた十八日の朝、一度は死にき
三月余のぬむりより覚めほんのりと二月十八日の昼を思ひき
十二年前二月は我にありしかど十二年後の二月はありや

宮里信輝 神奈川

小惑星「リュウグウ」の思ひ眠れるに一匹の蚊が闇を飛び来て
「リュウグウ」を啄み帰還の途につけり「はやぶさ2」は彼方日本へ
海洋はプラスチックゴミ天界はスペースデブリの星となりたり
戦争を知らず戦後を生きてをり戦前となるな険しき時代
花のもとブルーシートに酔寝して顔覆はれぬ雲の白布に

岡崎康行 新潟

歳晩の湧ける情緒に遊びをり外の吹雪をびしやり遮断して
「呼んでない」と妻は言ふなれど朝方にたしかにわれは人に呼ばれた
居間に出でし鼠よ冬のこの家の居間はストーブの燃えてゐる部屋
敗者へとかたむくさまを映さるるとは言へくビトバの肩の隆々
わが墓を用意せんとする妻乗せて運転をすることもたびたび

小島ゆかり 東京

早天のからんと広しざざんくわは滅びへむかふごときくれなゐ
しばしばもからだのどこか点火して猫が争ふ木枯らしの夜
つかひなれたる手はおのづから首ねつこ掴んで猫のけんくわ止めたり
もの言はぬときもの思ふわけでなくつぶりつぶりと干葡萄食む
難儀なることは明日へ持ち越さん明日なくなれば難儀終はらん

木畑紀子 京都

魔女人形吊すキッチンであな不覚 魔女の一撃くらひたりけり
かけこみし整体院はあかるくて「お任せください」と青年の笑み
「古式手技療法」下積み八年と手はゆるめずに蘊蓄を説く
メンテナンスしつつ劣化を遅らせよ説かれつつ身をほぐされてをり
コルセット締めホツカイロはりつけて杖にたよりていざ上京す

島田暉 神奈川

薔薇園に足をのばして来し散歩今日の記憶は花の香りす
朝日射し水面輝き始むれどわれ青き魚水底に棲む
転びてもまた起きあがり歩めるは春草唄ふみどりの冥土
水面の時計逆さに読みながら老少年の過去は白黒
春の野に大の字になり眠りなば大地にゆつくり溶けてゆくらむ

大松達知* 東京

なんだろうオレンジ色のセーターの人をしばらく抱いていた夢
セーターの感触は顎に残ってるハグというより強めに抱いて
顔も声も覚えていないその人がいいよと言った冬の昼の夢
夢のなか雨の香りをかいでいたようだ癒されたのはわが過去
炎まだわが身にありてあしうらのボルカドットがときおり燃える

田宮朋子 新潟

寒中といへどあたたか玻璃片のやうな六花の結晶を見ず

雪国に春一番が吹きすさぶ春は名のみのはずの立春

この冬は雪掘りをせず冬らしき冬が来ぬうち春風が吹く

雪消月むらみちで会ふ人は言ふエン、フル、イン、ザ、に氣をつけませう
標かたじけなくを履きて深雪の山里へ郵便配達するといふ歌

津金規雄 神奈川

あきらめの陽気さもちてポンポンと皇帝ダリアが冬空に咲く
僥倖は陽だまりに垂らす香水のあはれさに似て須臾の間に消ゆ
冬ざれの庭に合はせし焦点距離戻して読み継ぐ常陸国風土記
ひとひの疲れ吸ひたるコート脱ぎ捨てし四肢あらはなり鏡の中に
濡れそぼつ花の小ささ平穏と苦患の三寒四温がつづく



小山 富紀子 京都

食籠にひしめく亥の子おひとつとすすめ亥年の茶を点てはしむ
弟の友の茶園の森半の抹茶を点てぬの字を書きて
茶筌ぬき碗のみどりを掌につつま君へ供しぬ初釜の席
自服の茶におのれの矜持たしかめて平成最後の初春はるを迎へぬ
老桜樹花芽しつかと育むをしかと目に見て御寺をまかる

清水正子 神奈川

鯛起し聞きて育ちしチューリップ家中に活けて風邪追ひだす
お絵かきの定番なりしチューリップ咲きたけてあはれ秘めど全開
球根で咲けば用なき秘めどなれ花粉たつぷり雄しべにあれど
チューリップ原種どこにもないといふ出自謎めく花の明るさ
ドレッドヘアおもはず変り咲きにして神の知らないこれもチューリップ

小嶋一郎 佐賀

十羽まで数へてあふぐ鶴群れは無慮百余あて北指し帰る
縦長の二列に鶴は空翔けて百余の一羽降らず鋭きこゑ
にんげんで言へば一族郎党の鶴の百余羽翔けて乱れず
鶴群れをあふぎ見えなくなるまでの二分余りを腰痛忘る
出水いづみより二百余キロを翔け来つる鶴らに残る千キロの旅

後藤美子 北海道

凍てつきて開かぬ窓の大きガラス氷華満開朝光きらら
カナダより遙々とどく吹雪見舞転ばぬやうにと書き添へて終ふ
香に立ちて小豆煮えゆく大寒の厨にひびき外の面猛吹雪
メキシコ産南瓜オランダ産パブリカタイ産玉葱並ぶスパー
歩くより車が安全か零下十一度細く凍てつく凸凹歩道



田中愛子 埼玉

カメのやうに歩みウサギのやうに休み我は長生きするかも知れず
割引となれる弁当買ふわれは防犯カメラにみつめられぬ
誰からもやさしくされぬ六十代若くもなくて歳でもなくて
あやされて光のなかに笑まふ子よ多くほは神のご加護のしるし
庭木々を濡らして春の雨は降りあす会ふ人があるといふこと

橘 芳園 新潟

ヒトに似せヒトがつくりし野仏と案山子の見分けカラスにつかず
耳もたぬ石の地藏をみかぎりてこのごろわれは祈らずに過ぐ
百年に一度の秘仏御開帳間の長さほどありがたさうなり
本尊を方便法身と言ひし父木像の持つ美は言はざりき
塔像を拝まぬわれも釈迦堂の十大弟子像にまみえむときぬ

鈴木竹志 愛知

鳴き交はず鳥の声々聞き分くるすべなくわれは鳥になりたし
あたたかくなればその身を移す鳥冬の最中をひたぶる鳴けよ
寒きゆゑはしやぎてゐるは憎らしい鳥よ素直に寒気を厭へ
雪になる雨ならよきに雨のまま願ひかなはず節分近し
冬を堪へ命ながらふる草々に仏の座ありはこべらのあり

原賀環子 東京

俳優のやうで恥づかし追儼の夜、大き身ぶりに豆を撒くとき
うつとりとする画舫の当て字かな いつそ明治に生まれたかつた
あしびきの嵐を思ふなづき以てしえいくすびあの『テンペスト』読む
さくら貝さくら鯛あり美しき桜のかんむり被く生きもの
130—90をけふも保つためへわかめペプチド粒タイプ」のむ

福士りか 青森

津軽野はただ一面の雪の原ストープ列車の赤が浮き立つ
四畳半ほどの小さき無人駅のめぐりに藁の雪除けが揺る
ガタガタと木枠の窓を押し開けて「駅長さん」と呼べどもをらず
一輛に二台のダルマストープを置いて列車はスルメの匂ひ
列車にもミニスカートのCAがあてストープでスルメ焼きをり

藤野早苗 福岡

一か月かけてじつくり色づきぬ苺一顆は冬陽をためて
振袖の袂みだして春一番吹けりきさらぎ十九日けふ
全肯定したくなる春 旧友を訪ふごとくゆくカウンセリング
露の臺刻んで味噌と和へたるをふふめば春の味噌の目覚む
コチニールは貝殻虫で生ハムの着色料と知つてしまへり

風間博夫 千葉

嫌ひきらひキムチがきらひ妻と子は発酵食品キムチがきらひ
妻がすぐ換気扇まはすキムチ入り容器の蓋をわが開けたれば
晶子歌碑十八基歌十八首、うれしや四首「松戸」詠み込む
晶子歌碑揮毫十六基縦書きで春花さん桂石さんの揮毫横書き
「明治」なき年齢早見表載せる平成三十一年の手帳

水上 美季 東京

玄関の外まで見送る習慣が今も変はらぬ母と見る月

義理チヨコを職場で配るならばしが○ハラといふ言葉に圧される夕映えの江ノ島みなが海を見るシルエットでありわれも加はるだんだんと筆圧たかくなる夜更け肩に時間が降りつもりゆくサイレンが響く寒き夜すぎ去りゆく消防車おもふその赤黒さ

大野 英子 福岡

MRIのましろきドームで青空を想ひ流れる雲を見てゐた

離れ住むときと同じと思ひしが父母をらぬ日々このこの欠落感明日のためがんばるけふのわたくしが明日の自分を甘やかして甘やかなチヨコの香りに誘はれてデバ地下めぐる買ふあてがあり空腹の兆す五時半めぐりあふエクチュアフ神ひとさじのチヨコ

松尾 祥子 東京

うすべにの梅ひらくあさ夫に似る二重まぶたの男の子生れたり元号の変はれる年に生まれ来て律といふ名を賜はりし子よ

黄水仙ほのかに香りみどりごは弥勒菩薩の笑みうかべたりささらぎの部屋ふくらみぬ乳欲りて泣くみどりごの男声と女声喃語にて通するらしも手をのべてふと見つめ合ふみどりごふたり



高野公彦著 平成30年11月刊 各巻二八〇〇円(税別) 送料三〇〇円

明月記を読む

—定家の歌とともに—

上下

コスモス叢書第一一四八篇

短歌研究社

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼二二二-二五〇六

奥村晃作歌集

平成31年2月刊 一四〇〇円(税別)

送料三〇〇円

八十一の春

コスモス叢書第一一五〇篇

(株)文芸社

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七-一五-一六

第34回詩歌文学館賞受賞

小島ゆかり歌集

平成30年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

六六魚

コスモス叢書第一一四三篇

本阿弥書店

著者住所 〒188-0001 東京都西東京市谷戸町二一八-二七-九一四

古屋祥子歌集

平成30年11月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

地上根

コスモス叢書第一一四二篇

柘書房

著者住所 〒371-0116 群馬県前橋市富士見町原之郷一一二四